

## VI 4 系列の学び

### 1 郷土・環境系列

#### (1) 花植え交流

##### ①目的

草花の苗を通して、人々の結びつきや地域の結束力を固めることで地域力の向上を図るとともに、生徒が教える立場に立つことで自主的に考え行動する力を養う。

##### ②内容

学校で育てている草花を用いて、子育て支援センター「かんがるー」、老健施設「さくらんぼ」にて、毎年2回(春・秋)花植え交流を行っている。その際、始めと終わりの挨拶、使用する草花の紹介、寄せ植えの指導など、すべて生徒が主体的に運営・活動している。



##### ③検証

花植え交流を行う時期には、草花がまだ咲いていないものがある。そのため、生徒が草花の紹介を担当する際には、A3用紙に咲いた時の絵を描いて表現していた。また、科名や花言葉、草花の特徴など、自分が伝えたいと思ったことをわかりやすく伝える工夫もしていた。交流中も周りをよく見て、今何をしなければいけないか考えてよく動くことができた。草花が咲いているものとそうでないものでは、寄せ植えを行う際に選ぶ率が大幅に異なるため、来年度以降は花植え交流の日に草花の開花をあわせて栽培していきたい。



#### (2) 松阪市子ども会連合会との植樹活動

##### ①目的

松阪市子ども会連合会の児童が育てた苗木を、本校生徒が手入れした校内雑木林へ植樹する。この植樹を2年生が指導し、水を育む自然豊かな森林の利用について互いに学ぶ。

##### ②内容

松阪市子ども会連合会は、市内の子ども会活動の充実を図り、子ども会を健全に育てることを目的とする団体である。子ども向けに年間20回程度の企画を実施しており、そのうち1回を本校と連携して植樹活動をこの数年行っている。生徒は系列教科において、学校林や林産物利用に関わる学習をしており、これを踏まえて令和2年2月22日(土)に植樹指導を行った。



##### ③検証

当日雨天のため参加児童が少なく、生徒の指導機会が減少し残念であった。



## 2 介護福祉系列

### (1) ボランティア基礎

#### ①目的

地元の株式会社三ツ知製作所より、看板をリニューアルするのを手伝ってほしいという依頼があった。企業としては、過疎化の進む地元には働き口があることを若い人にも知ってほしいという思いがある。高校生はその思いをくみながら看板製作に取り組むことで、高校生の発想力を活かし社会にコミットし、地域の活性化にも貢献することで、ボランティアの心を学ぶことが目的である。

#### ②内容

対象となる看板は飯南高校から徒歩ですぐの国道沿いにあり、スクールバスからもよく見える。製作にかかる費用は三ツ知製作所が負担し、看板のねらいは企業までの道案内と宣伝のためだが、学校が取り組んでいる地元の飯南、飯高の魅力や高校の案内も入れてもよいと企業から提案があった。



生徒は介護福祉系列の2年次選択授業「ボランティア基礎」選択者6名である。期間は1年間で終わらなくてもよく、製作の方法によっては次の学年に引き継いで作り続けてもよいと企業から提案があった。まずは、三ツ知製作所を訪問し、企業を知るところから始め、看板づくりのノウハウを看板製作会社の方から聞いた。また、屋外広告物としての自治体の規制や、使ってよい色の範囲についても三ツ知製作所から話を聞いた。



#### ③検証

看板製作に関わる説明を聞く過程で、地域に関わることを多く学ぶことができた。三ツ知製作所は、中国や米国、タイにも工場があり、現地に設備の指導者として働くこともある。飯南町で働きながら世界とつながっていると感じることもあると担当者は話してくれた。実際、中国から来た実習生が働き、外国人のほとんどいない飯南町で会社の宿舎で暮している方もいる。日中政府間での軋轢は続いているが、採用担当者は「ほんとによく働く」と、マスコミからの情報に縛られないでほしいと言われていた。地域の小学校で中国人実習生が作った水餃子をふるまい、交流会も行っている。

また、カリキュラム開発等専門家の浅野吉英氏よりアドバイスをいただき、最後の授業にこのプロジェクトの名前を考えた。命名することで主体的な姿勢を作るのが目的である。当日は全員が意見を出し合い、友人の意見に追加したりと30以上の提案があり、それを数個まで絞った。活動の中で、企業のキャラクターの替え歌を作って歌い出す生徒や、動画を作って会社を知ってもらいたいと提案する生徒も出るなど、様々に積極的な活動が行われた。次年度は、地域の魅力や課題を学んで看板製作に活かし、この地域で学ぶ高校生ならではの看板製作に発展させたい。



### 3 総合進学系列

#### (1) 学校設定科目「社会科学入門」

##### ①目的

本科目は高大連携授業として、県内大学から行政学、看護学、教育学、経済学を専門とする教員を講師として招請し、各専門分野の講義や演習を通じて学問に対する興味・関心を育み、社会科学を中心とする学問の基礎的素養を養うことを目的としている。一昨年度から少しずつ松阪市の政策について考える時間を確保し、昨年度は生徒の要望から松阪市長を招聘するなど、地域を題材にした学びを進めている。

##### ②内容

4人の大学教員が隔週で高校を訪問し、高校教員とのチーム・ティーチングによりリレー方式で授業を行った。本年度は飯南地域(広くは松阪地域)を学びの題材とし、各大学教員に以下の内容で講義・演習をしていただいた。

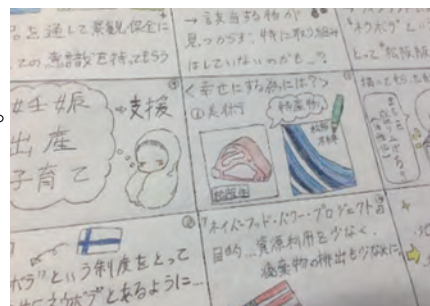
- ・村林 守 三重中京大学 名誉教授(行政学)  
社会を支える三つのシステム(5/7)、私たちを取り巻く地域の課題 (5/28)
- ・中北 裕子 三重県立看護大学看護学部 准教授(看護学)  
看護職の現状と役割、松阪市の地域診断(6/11)、高血圧予防への対応策(6/25)
- ・中西 良文 三重大学教育学部 教授 (教育学)  
地域学習の授業計画を考える(9/24)、授業計画の共有と改善(10/15)
- ・内田 秀昭 三重大学教育学部 准教授(経済学)  
地方創生と農業(11/5)、地方創生と地域通貨(11/19)



高大連携授業以外にも、「興味のあることと地域との関わりを考えよう」と題して、夏休み前に生徒自ら主題を設定して地域に関する内容に取り組んだ。自分自身の興味のあることをマインドマップの作成を通して可視化し、その関心事に関連する松阪市の政策を調べながら、16分割メモによるまとめを行った。また学年末には、各自が設定したテーマについて研究発表会を行い、大学教員の講評を受けた。

##### ③検証

「地域」をキーワードとして各大学教員に講義・演習をしていただいたところ、生徒からは「学問分野は違うが、全て地域に関わることだと思ったので、学びに繋がりがあると感じられた」、「以前に講義を受けた先生と似た内容が出てきて、理解がしやすかった」という意見が出た。そして、各講義でデータ資料が取り扱われたことから、数学や理科といった教科的な学習だけでなく、根拠資料としてデータが重要であることや、データを見て物事を分析する必要があることなど、次第に生徒は肌感覚で実感することができた。このように地域を軸に据えることで、これまで以上に教科も越えた複合的な学びになった。さらに、これらの内容を学んだ上で、興味のあることと地域を繋げることによって、一層身近に地域を感じながら主体的な学びが進められたと感じる。



また、中西先生の「中学校1年生の教師になったとき、地域学習をどのように展開していくか」という実践的な試みは、教員志望の大学生でも難しい課題であったが、生徒は地域のお茶や林業、仕事に着目して、発見学習や協同学習の観点も取り入れながら独創的な授業計画を考えるに至った。この学びは、今後小・中学校への生徒主体による出前授業を想定できる内容であり、生徒が地域へ飛び出す上で貴重なものとなった。

## (2) 学校設定科目「国際社会と日本」

### ①目的

本科目は様々な時事問題について学ぶ中で、国際社会における日本の役割についてグローバルな視点で考える力を身に付けることを目的とする。また、異文化に触れて理解することで、国際人としての日本人のあり方を学ぶ。今年度は鈴鹿大学、株式会社鈴りん探偵舎、松阪市、飯南高校が4者協定を締結したため、鈴鹿大学の留学生と交流する機会が持て、国際社会をより身近に感じることも想定した。

### ②内容

鈴鹿大学国際人間科学部国際学科観光ビジネス領域の冨本真理子教授と意見交換をし、11月28日(木)3・4限に交流授業を行った。当日は中国2名、モンゴル1名、ネパール1名の留学生から、留学生の生い立ちも含めて出身国の紹介を聴いた。その後、アメリカ出身の松阪市CIRも加わっていただき、質疑応答を行った。



また、飯南・飯高地域や松阪市を知り、外国人や海外へも知ってもらおうと、地域のもの・人について英語でプレゼンテーションを行った。生徒は住んでいる地域については分かるものの、他の地域については知らないことが多い。そのため、紹介するテーマについて簡単に学習した後、さらに情報を得て発表を行った。

### ③検証

今年度初の試みであった高大連携による留学生との意見交流は、留学生に自分自身の視点で語ってもらえたため、生徒も外国の生活習慣や文化についてよく理解できた。また、話の中で外国の都会も垣間見えたが、生徒たちが暮らすこの地域と似ている風景や様子を見て、自身の生活の場と比較しながら身近に感じ取れているようであった。ただ残念だったのは、今年度はこの1回のみでの交流授業となってしまったことである。機会があれば複数回設定し、より交流する機会を多く持ちたい。

また、英語でのプレゼンテーションについては、今回スライド枚数を指定したため、紹介する情報が限られてしまった。限られた紙面でまとめるという力は付いたと感じるが、生徒の多様な伝える工夫を制限してしまったことは今後の課題としたい。また、英語で表現するためにALT・英語科教員に尋ねながら作成したり、簡単な表現にしたりする作業を行ったが、十分な時間がとれず、分かる英語・分かりやすい表現になっていない箇所も多く見られた。今後は授業時間を精査し、情報をより他者へ伝えるために工夫する時間を確保する必要がある。

## 4 コンピュータ系列

### (1) マーケティング「飯南高校ブランディング～飯南高校キャラクターができるまで～」

#### ①目的

マーケティング活動の重要な戦略の一つにブランディングがある。ブランディングとは、ブランドとして認知されていないものをブランドに育て上げ、企業価値を向上させることである。ブランドというと高級品というイメージがあるが、その対象としては、商品やサービス、人物、地域、祭事など、あらゆるものが該当する。飯南高校ブランディングでは、地域の特色をモチーフとした学校オリジナルキャラクターを作成する過程で、地域のことを学び発想力を高め、具体化し発表することで、学校だけでなく地域をアピールする地域ブランディングにつなげていく。

#### ②内容

4つの系列に学校全体を加えた5つのキャラクターの土台となる動物を設定することから始めた。インターネットで地域の特産物や観光地、祭事などを調べ、収集した地域の情報と系列の特色をモチーフにあてはめ、各プロフィールとイラストを作成した。各キャラクターの名前は、飯南高校、飯南中学校、飯南高等学校から募集した。決定した名前は文化祭で発表し、同時に人気投票とグッズの展示を行った。

#### ◎完成したキャラクターとプロフィール

系列	飯南高校	コンピュータ	郷土・環境	介護福祉	総合進学	
モチーフ	動物	ネコ	ネズミ	ウサギ	クマ	キツネ
	地域	ハナノキ	烏岳	棚田/竹灯籠 飯南茶	ささゆりの里	粥見神社の祭 てんてん
	系列	学校全体	マウス/電卓	作業着/野菜	介護服	鉛筆/問題集
趣味・特技	ハナノキ研究	パソコン早打ち	竹灯籠をつくる	百人一首/書道	太鼓をたたく	
好物	だら焼き	手打ちそば 鯛焼き	深蒸茶を使った パンケーキ	香肌峡でとれた 鮎の塩焼き	でんがら	
性格	おしとやかで 自然が好き	面倒くさがりや	優しくて 真面目	お世話が好き みんなに優しい	お祭りが大好き (てんてん)	
イラスト						
名前	ハナノ木花 (きっか)	コンチュー太と カラス先輩	う茶っぴ	サユリン	てんこん太	

#### ③検証

飯南高校をブランディングするにあたり、全員で強みと弱みを考えた。強みは地域の豊かな自然に囲まれた環境、弱みは交通が不便で認知度が低いことであった。強みを生かした高校生らしいブランディングツールを考えた結果、学校と地域の特色を生かしたキャラクターを作成することになった。情報を収集する中で、地域の特産物や観光地、歴史を知る事ができた。また、連携中学校の力を借りることで名前の選択肢が増え、納得のいくキャラクターを完成させることができた。今後は、キャラクターを使ったグッズやアニメーション・CMをWeb上で公開し、飯南高校の認知度を高め、地域の良さを全国にアピールできるよう発展させていきたい。



## Ⅶ 授業改善にかかわる研修

### 1 「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善研修会（第1回）

#### (1) 目的

これからの社会で生きていく生徒たちに、どのような力を付けなければいけないのか理解する。その力を付けるために、どのような授業が必要なのかを理解する。授業を変えるために必要な考え方やスキルの基本的な知識を学ぶ。

#### (2) 内容

7月1日(月)、本校会議室において、ユマニテク短期大学鈴木建生学長をお招きし、ペアワーク・講義を中心に授業改善研修会を行った。まず、鈴木先生が授業改善をするようになった経緯や、学校組織でコーチングを進めていったことで生徒が変化した様子をお聞きした。その後、実際にペアワークを通して、対話には「傾聴」と「質問」、「承認」が大切になることを学んだ。また、思考の可視化や生徒の質問・疑問は今後の教材化にも繋がり「宝」であるという、新たな気づきを得られた。



#### (3) 検証

当日のアンケートから、「傾聴することの大切さを感じた」や「グループ学習を取り入れた学びを实践したい」との声があり、2学期から授業内で取り組む様子がみられた。また、研修会終了後も鈴木先生への質問が続き、連携中学校教員や他校高校教員も含めて23名が参加した広がりのある研修となった。

### 2 飯南高校と共に未来を拓く地域活性化セミナー

#### (1) 目的

地域を舞台とした課題解決型の探究活動を通して将来を担う人材育成を目指すため、本校の現状や今後の活動を地域の方と共有し、「飯南・飯高地域での探究活動とは何か？」を学ぶことを目的とする。

#### (2) 内容

7月22日(月)、本校環境総合実習室において、飯南高校活性化協議会と松阪市が主催となり大正大学浦崎太郎教授をお招きし、本セミナーが行われた。岐阜県立吉城高等学校の実践を通して、現在地域と協働してどのような活動が行われ、どのような生徒が育てられているのかを共有した。また、その活動をしながらかと地域がともに急成長していく姿や、日本の教育が今後進んでいく方向性についても確認することができた。



#### (3) 検証

本校が今なぜ地域との連携を進めているのかについて、有識者からのコメントを踏まえて地域の方と共有できたことはとても有意義であった。また、社会の変化によってこれからの時代に必要な力が時代とともに変わり、地域で探究する必要性についても地域ぐるみで確認できたのは意味があったと感じる。当日は地域の方以外にも本校教員・連携中学校教員、さらには生徒も参加をし、総勢99名もの来場者があったことは、今回の本校の取組や今後の社会の動きに関心が高かったものと考えられる。

### 3 「主体的・対話的で深い学び」のための授業改善研修会（第2回）

#### （1）目的

『主体的・対話的で深い学び』を実現する授業の技法」を身につける

#### （2）内容

##### ①事前研修

授業の目的（授業方針）や態度目標・学習目標の意義についての説明を受けた。

##### ②鈴木建生先生による本校3年生への授業

12月16日(月)、総合進学系列生徒16名(科目:学校設定科目「国語実践」)を対象に模擬授業をしていただいた。初めにワークシートを配布して授業の目標を伝えた。その後生徒は個別→ペアorチームで課題に取り組み、チームで合意を得たものをまとめ、最後に授業のまとめと振り返りを行った。



##### ③事後研修及び授業改善のための研究協議会

協同学習、ALの流れとしての個人思考→集団思考→個人思考や振り返りシートの重要性が話された。また、実際に授業デザインし、グループ内で共有した。

#### （3）検証

目標が明確であったため、生徒は授業を計画的に過ごすことができた。また、「振り返りシート」によって教員も生徒も目標到達度を確認できた。今回、多くの生徒が自己採点「1～4」のうち「4」をつけていた。研究協議では、質問と傾聴が対話を生むということや各自が作った授業デザインをグループで共有することで各自の授業での工夫点などを知ることができ、AL、協同学習でのポイントや基本を改めて確認できた。

### 4 問いづくりに関する教員研修および生徒向けワークショップ

#### （1）目的

3年次「いいなんゼミ（総合的な探究の時間）」を始めとした生徒の探究活動を充実したものにするため、課題探究の方法や評価、問いづくり（課題発見）の指導の仕方を身に付ける。



#### （2）内容

2月18日(火)、本校会議室において、産業能率大学皆川雅樹准教授をお招きし、問いづくりをワークショップで実践しながら研修を行った。また、対話の必要性やbeing、探究活動だけにとどまらず、目的を持った授業づくりの必要性についても講義いただいた。

#### （3）生徒向け問いづくりワークショップについて

2月19日(水)、2学年「キャリアデザイン」の授業において、皆川准教授に連日お願いをし、昨日教員研修の内容を生徒対象に行っていたいただいた。「問い」とはどのようなものか、「問い」を考えながら自己のあり方や生き方についても考え、「質問のシャワー」をお互いに掛け合いながら、問いを作るだけでなく質問を投げかける重要性に生徒たちも気付くことができた。

#### （4）検証

生徒の問いをどのように引き出すのか、ワークシートを実際に活用しながらの学びは、今後の探究活動の指導に役立つものとなった。また、「質問」・「発問」・「問い」の違いを理解することができ、日々の授業改善においても大変有益な研修であった。

## VIII ベンチマーキング報告

### 1 第2回全国高等学校小規模校サミット

#### (1) 目的

全国の小規模高校の生徒や教員と交流し、親睦を深めることで対話力や発信力を養う。また、それぞれの地域が抱える課題についての意見交換を通して、将来的に飯南・飯高地域で活躍できる資質や能力、協働意識を身に付ける。

#### (2) 内容

7月31日に山形県小国町で開催された山形県立小国高等学校主催の「第2回全国高等学校小規模校サミット」に本校生徒3名(3年生2名、2年生1名)、全国各地から18校156名の生徒と教員が参加した。30日のプレセッション(生徒交流会)から始まり、31日のサミットでは各校の取り組み紹介やワークショップ、東北芸術工科大学の岡崎エミ准教授の講演を通して、高校生ならではの元気溢れる交流を行った。

ワークショップでは、「小規模校だからこそできることを考えよう!」というテーマの中で、過疎化や少子高齢化問題に直面する小規模校の未来について話し合い、学校行事やボランティア活動などを通して地域のためにできることを考え、「失敗を恐れずに行動を起こすこと」、「困難にも立ち向かい諦めずに挑戦し続けることが大切」などの高校生らしい前向きな意見がたくさん飛び交っていた。



#### (3) 検証

今回のサミットに参加したことで、全国各地で同じ課題を抱えた高校生が日々奮闘していることを知り、多くの刺激を受けることができた。サミットが終わった後も生徒同士がSNSで連絡を取り合い、ペットボトルキャップを集める活動を連携して行うなどの交流を続けている。

地域を活性化させるには、高校生の若い力や発信力が必要不可欠である。今回のサミットで学んだ「失敗を恐れずに行動を起こすこと」、「困難にも立ち向かい諦めずに挑戦し続けることが大切」という言葉を今後の活動への活力にし、これまで以上に地域に密着・貢献する活動を積極的に行っていきたい。

「高校生が地域に貢献し、地域を活性化させる学校で日本一の学校を目指す」という目標のもと、飯南高校の挑戦はこれからも続いていく。



## 2 山形県立小国高等学校 ～全国高等学校小規模校サミット開催校～

### (1) 目的

第2回全国小規模校サミットを開催した山形県立小国高等学校。このサミットの開催に至る経緯や生徒が主体的に取り組むまでの成長過程、そして地域や行政などの関係機関との協働や関係づくりについて意見交換し、今後の本校における発展につなげていく

### (2) 内容

山形県立小国高校は、新潟県と山形県との県境に位置する人口7,300人ほどの小さな町である小国町唯一の高等学校である。全校生徒が72名の小規模な学校であるが、昨年度と今年度に全国高等学校小規模校サミットを開催している。このサミット開催に至るまでの経緯や教育内容、また地域や行政との協働などについて視察を行った。

このサミットを開催した経緯には、岩手県立花泉高等学校との交流がきっかけとなり、小規模校ならではの思いがお互いを刺激し、「もう一度やりたい、他の学校とも」という生徒の思いから小規模校サミットにむけた取組が始まっている。この取組は、学校内だけでは終わらず、小国町を巻き込んだ取組に発展していく。また地域と協働する授業や課外活動を数多く実践しており、日常的に地域との学びや活動が取り入れられている。その1つにファシリテーション研修がある。多様な人がともにビジョンを描くことができるよう、生徒が主体となって取り組ませたいと考え、東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科のサポートを得ながら研修を行っている。この力は、全国高等学校小規模校サミットの運営だけでなく、日頃の授業や学校行事など学校生活においても活かされ、生徒の成長につながっている。

また、これまでの教科の内容に加えて、地域と協働して取り組むことや社会的課題にむけた取組など、学校という場だけではなく地域というフィールドを活用することによって生徒のあらゆる可能性を引き出し、自主性や自己有用感を高めることとなっている。

### (3) 検証

「全国高等学校小規模校サミット」という企画・実現に至った原動力は、生徒の声や主体性を大切にしていることにあり、そしてそれを支えてきたのは、教員だけでなく地域や行政などとの「協働」という点にあった。地域や行政、企業、大学という様々なフィールドを活用した学びが、生徒の可能性を引き出し、自己有用感を高め、さらなる成長につながっていることを実感した。今回のベンチマーキングを通して学んだことを今後の教育活動につなげていきたい。

### 3 愛媛県立三崎高等学校 ～四国最西端の最先端の学び～

#### (1) 目的

三崎高等学校は、生徒一人ひとりを輝かせるための「学びの個別最適化」や「地域と協働する学び」に基づいた教育活動に取り組む先進校として、全国から注目されている。ベンチマーキングを通して、どのような学校運営や授業が展開されているかを把握し、本校の発展に繋げていく。

#### (2) 内容

四国最西端に位置する三崎高等学校は、伊方町唯一の県立高等学校である。令和元年度から全国募集を開始し、地域に根ざした教育環境のもと、生きる力と豊かな心を身に付ける学びを展開している。今回のベンチマーキングは7月末に開催された「第2回全国高等学校小規模校サミット」での交流がきっかけとなり実現した。平成27年度から地域と協働した活動をスタートさせ、地域課題を他人事ではなく「自分事」として捉え、自らの研究に主体的に取り組ませる指導を行っている。

また、積極的に外部人材と連携して活動することでコミュニケーション能力や企画力が伸長し、地域に対する愛着も深まったという。その結果、積極的に活動に参加した生徒が国公立大学へ進学し、就職面では地元就職者が急増するなど地域と協働した活動の成果が顕著に表れてきている。

学習面では少人数でのTT教育を行い、学び直しが必要な生徒から国公立大学を目指す生徒まで、幅広い学習指導が展開されている。また、昨年度からは伊方町が運営する公営塾(未咲輝塾)が校内に開設され、生徒が積極的に勉強に取り組む環境が整備されている。



#### (3) 検証

津田一幸教諭との対話の中で、「生徒の主体性を尊重する」と「地域との連携」が特に印象的であった。生徒が「やってみたい」などのアイデアを出したことは否定せずに実行させる。時には失敗することもあるが、その失敗こそが生徒の成長に繋がる。このことは、生徒の気付きを大切にする指導であると感じた。地域との連携では、NPOや企業との協働を行う上で教員は必要最低限のことだけ行い、生徒を地域へ思い切って任せる姿勢が大切である。協働でのイベントへの引率は基本行わず、主催者にすべて任せる。その取り組みこそが生徒を大きく飛躍させる近道であると学んだ。今回のベンチマーキングを通して、学んだことを今後の教育活動に活かしていけるよう日々精進していきたい。

## 4 全国グローバルリーダーズsummit

### (1) 目的

本校では、地域課題を自ら解決を図り実践できる力を養い、地域で活躍する人材の育成を掲げている。学校として取組が始まって間もない中、宮崎県立飯野高等学校が主催するこのsummitを通じて、「グローバル」な視点で活動する高校生や大学生、高校教諭、行政職員、民間企業、NPOなど様々なカテゴリーに属する人たちが一同に会した越境的な学び合いの場に参加することで、他校の取組を知ることや本校でも実践できることを模索し、新たな一步を踏み出すきっかけとする。

### (2) 内容

#### ① 1月10日 宮崎県立飯野高等学校 グローバル学習成果発表会

飯野高校の普通科総合コース、普通科探究コース、生活文化科による成果発表会が開かれた。制服で発表していた生徒もいれば、活動中に着用した実習服で発表に臨む団体もあり、プレゼンの写真等から活動風景を読み取ることができた。受付、設営など全て生徒主体で行われており、発表会をより良いものにしたいという気持ちが伝わってきた。



#### ② 1月11日 高校生プロジェクト事例発表、未来カフェその1 講演会、えびの市内ツアー

会場となる飯野高校でグループ討論や事例発表が行われた。広島県立大崎海星高校、兵庫県立生野高校、立命館宇治高校、筑波大学付属視覚特別支援学校による事例発表が行われた。昼食後、高校生は講演会、大人と大学生は勉強会として各先生方から講演を受けた。その後えびの市内ツアーで、宮崎県で初めてできた真幸駅に向かい記念撮影を行った。その後、別会場で飯野高校の事例発表を聞いた。



#### ③ 1月12日 未来カフェその2、NEXTアクションの発表

各テーブルに1つの議題が設定され、生徒たちは興味のある議題の席に座り、グループディスカッションを行った。生徒も3日間通して積極的に参加しており、NEXTアクションは帰りの都合により不参加であったが、やり残すことなく話すことができた生徒の表情は素晴らしいものであった。

### (3) 検証

今回の参加で、本校生徒が他校の生徒と話し合ったり、本校の取組をPRしたりする様子が多く見られた。県外の先生方も本校で取り組んでいる活動に、とても関心を持たれており、美術部がFacebookで掲載している「緑茶ラテアート」について、全体で紹介してくれたりもした。参加を通して、過疎化が進む飯南飯高地域だからこそ、この場で学べる教育に取り組むことが、生徒と学校、地域の成長に繋がるものだと感じた。



## 5 第6回SCHシンポジウム

### (1) 目的

地域との協働による高等学校教育改革推進における先進的な事業の取り組みを知り、本校生徒がシンポジウムに参加する他校の生徒や本気の大人と関わることで、地域課題解決を自分ごとと捉え行動できる力を身につける。

### (2) 内容

「高校を人材流出装置にしないために」のかけ声で始まったSCHシンポジウムは、目まぐるしく変化していく社会の中で、高校生も大人も変態できる学びの土壌作りを考える機会としている。

2月23、24日の2日にわたるプログラムとなっており、初日午前は大正大学浦崎太郎教授の「これからの教育界に必要なこと」の講演をはじめ、三菱UFJの阿部剛志氏の「学びの土壌とは何か、なぜ必要か」や小国高校生による「小国高校生の変態物語～私たちが変わった理由～」の発表があり、地域との協働における先進的な取組を知り、多くのインプットがあった。午後からは3つの分科会にわかれる機会があり、引率教員と生徒でそれぞれの場所へ参加した。最後は初対面で3人1組を作りワークショップを行い、1人持ち時間30分の中で、自分の考えていることを発表→質疑応答という取組を行った。2日目午前は、長野県教育委員会の内堀繁利氏の「長野県から見た教育行政の可能性」の講演後、前日に全体から募った教育課題をテーマにオープン・スペース・テクノロジーを行った。午後からは、参加グループごとに分かれ、シンポジウムで学んだことを持ち帰ってどのような活動をするかというAction Planを作成した。本校生徒が「日本一を考える会Vol.1」を教員と生徒で行いたいと発表し、会場が笑顔と拍手に包まれた。



### (3) 検証

先進的な取組を行っている大人や高校生の発表を体験し刺激を受け、参加生徒は自分がこれまで行ってきた活動や今後取り組みたいことを初めて会う大人に積極的に話していた。また全体の場で自ら発表することで自信をつけていた。今回参加したことにより、教員・生徒ともに本校のあるべき姿についての探究ができたと感じる。課題としては、インプットした情報・意欲を元にSCHシンポジウムで考えたAction Planを実際に学校で行えるかどうかである。

## Ⅸ 本校主催「第2回答志島サスティナブルキャンプ」

### 1 目的

地域課題の解決策を、他校の生徒や大学生・地域の大人と共に考えることを通して、探究心を育てると共に、そのために必要なコミュニケーション能力や論理的思考力を作成する。また、答志島の地域課題を考えることを通して、自らの地域への思い、故郷を大切に作る気持ちを醸成する。

### 2 内容

#### (1) 日程や場所、参加者

8月26、27日、答志島コミュニティセンターや各フィールドワーク先において活動を行った。本校生徒5名、静岡県立榛原高等学校生徒19名の他、茨城大学生4名、引率高校教員や大学教員、関係団体、答志島の方々等、約30名の大人も参加した。

#### (2) 活動内容

本校関係者が趣旨説明等を行った後、答志島の魅力探しフィールドワークを約3時間行った。生徒たちは、地域の仕事や自然を見聞するなど島中を散策した。夕食後、今回のミッション「魅力をSNSで発信する」に向け、各班で動画作成を行った。また、島の青年団10名に来ていただき、島の生活について意見交換を行った。



2日目は引き続いて、フィールドワーク・動画作成を行った。各班が趣向を凝らした動画は、島の方々を迎えての成果物報告として発表された。インタビューを交えたものや、島の方々と寸劇を行ったもの、体を張って自然をアピールするものなど、各班2分程度の個性豊かで魅力的な動画となった。発表後、島の方々や教員等からコメントをもらい、全体での振り返りを行った。最後に総括として、学びのスタイルの変化や対話についての講演があり、これまでの知識詰め込み型教育ではない新たな学びについて、今回のサスティナブルキャンプとの繋がりを共有して活動の意義を振り返った。



### 3 検証

他校の生徒や大人との交流を行いながら学ぶことは、生徒にとって大きな刺激となり、対話力が格段に向上したと考えられる。また、少し上の大人である青年団から漁師としてのリアルな声を聴いたことは、今後の進路選択にも参考になったと感じる。

この活動のように校外活動に参加する生徒、校内での学びをより自分ごととして捉えることのできる生徒を育てる必要がある。そのために、学びの場を提供することや身に付けたい力に基づいた授業改善を行うことが求められる。また、教育現場あるいは行政との建設的な対話も必要だと再認識できた。

## X 部活動での地域協働活動

### 1 ボランティア部

#### (1) 目的

校外活動を通して、様々な人との出会いや体験から様々な発見や感動・喜びを感じ、自己の成長を図る。世代の異なる人との交流から、身なり・言語・行動等の礼儀を身に付ける。また、地域の方々とのふれあいを通して、それぞれの立場や思いを押し量り、相手を思いやる心を育み、地域貢献につなげる。

#### (2) 内容

	取り組み	内 容
4月	子どもまつり	子どもまつり出展団体の補助等
5月	ボランティア研修会	聴導犬を知り、正しい知識を学ぶ講習会
6月	ふれあい体育祭 古切手講習会	競技による障がい者及びそのご家族との交流 使用済み切手の集め方、活用方法を学ぶ
7月	地域スクール 松阪地域献血街頭ページェント	障害のある子どもとの交流 (居場所づくりボランティア) ショッピングセンターでの献血啓発活動 (クイズ大会等の運営)
8月	夏祭り出展支援 24時間TVボランティア	障がい者施設の出展支援・交流 ショッピングセンターでの募金活動
10月	ジョギング大会 総合防災訓練	飯南地域でのジョギング大会での司会等 近畿府県合同防災訓練・救助訓練に参加
11月	氏郷まつり いいなんふれあい祭り	松阪駅付近での献血啓発活動 千人鍋の手伝い及び被災地への募金活動
12月	松阪地域献血街頭ページェント	ショッピングセンターでの献血啓発活動 (ティッシュ等の配布・献血依頼呼びかけ)
2月	地域の元気応援事業公開プレゼンテーション 道の駅コラボプロジェクト	公開プレゼンテーションの司会進行 バルーンアート教室及びプレゼント

#### (3) 検証

様々なボランティアの依頼があり、生徒が自ら希望し選択したイベント等に参加することができた。事前に打ち合わせを行い、司会の練習をした後本番に挑むなど、責任を持って係の仕事をやり返げる力を身に付けた。特に飯南地域で行われたイベントでは、イベントスタッフとして地元の方々との交流を深め、地域貢献に努めた。

一方、部員内でのコミュニケーション能力には差があるため、校内における研修会などを取り入れ、ボランティアに関する知識やコミュニケーション技術を高める機会を設ける必要があると考える。来年度は、年度当初にボランティアセンターの方による講習会を開催予定である。



## 2 美術部 【IINAN いいな！LATTE】～ 緑茶ラテアートで描く地域の未来～

### (1) 目的

本校が所在する飯南・飯高地域は、温暖で降水量が多く茶栽培に適しており、山間地特有の葉肉の厚い茶を100秒以上蒸した、まろやかなコクが特徴の深蒸し緑茶が有名である。美術部では、その茶を使用して「緑茶ラテアート」に挑戦している。「飲んでよし！見てよし！」、そして、「飯南・飯高って、いいな！」と感じていただくため「IINAN いいな！LATTE」と命名した。地元のお茶の素晴らしさを多くの人に伝えること、そして、そのことを通じて地域貢献することを目的として一杯ずつ心を込めてアートを施している。現在は、「地元の高校生が地元のお茶を使い地元のお茶屋で提供する緑茶ラテアート」をコンセプトに、地元のお茶屋と協働し店舗カフェにて出店することを活動の軸としている。

### (2) 内容

一般的にお茶ラテといえば、抹茶ラテである。しかし、飯南・飯高地域では、抹茶を生産しておらず、作っているのは深蒸し緑茶である。緑茶は、深蒸しにすることでお茶が本来的に持つ苦みや甘み、コクなどの魅力が際立ち、見た目も色が深くなる。深蒸し緑茶ラテは、地元のお茶の品質が高いが故に「ここにしかない」商品価値が成り立っている。

平成30年度7月下旬に活動を開始し、約2ヶ月後の9月末には地域の関係者を招いて試飲会を開いた。そこで、深蒸し緑茶ラテアートを見た参加者が驚いて写真に収め、「飯南高校でこんなにも素敵な活動が始まるなんて思いもしなかった！」など、生徒に笑顔で声をかけていただいた。10月には、道の駅でのイベントで初めて一般のお客様に提供する機会を得て、120名ほどのお客様に提供した。その他、三重県知事による試飲や地元のお茶屋で毎週の出店、地元の中学生にラテアート教室を開き道の駅でともに出店、テレビの生放送に出演するなどした。また、地元のお茶屋と協働した売り上げの一部を地元の活性化に役立ててもらおうと松阪市に寄付した。



### (3) 検証

過疎や高齢化が進む飯南・飯高地域ではあるが、高校生の活動を通じて多くの人々が飯南・飯高地域を訪れるようになったり、地元のお茶の素晴らしさに触れたりするようになるなどの形で地域貢献したい。そして、お茶の魅力を発信したり若い世代へも広げたりするなど「高校生だからこそ解決できる」課題はたくさんある。飯南・飯高地域には、素晴らしいお茶、そして、素晴らしい人がいる。地域の方々に学びながら乗り越えていきたい。

### 3 應援團サークル

#### (1) 活動の目的

飯南高校應援團サークルは、「学校地域を盛り上げる」ことを主眼に活動を行っている。地域の大人たちと積極的に関わり、高校生が地域のために出来ることを主体的に考えながら、自分たちができる地域課題解決を行っている。

その中で、地域を知り、郷土愛を育みながら地域課題を自分ごとと捉え、主体的に考える姿勢をみにつける追究力、課題解決をするために大人や学生と深く関わりながら共に活動する対話力や創造力、地域の良さや自分たちの活動を効果的に多くの人に知ってもらうための発信力の資質能力育成を養う。これらの力を伸ばしながら、生徒それぞれの自走力を身に付けさせることを目的としている。

#### (2) 地域イベントへの参加

##### ①目的

地域の大人と繋がり、地域と深く関わる機会をより多く作る。またその中で地域課題を見つけ、高校生だからこそできることを探究する機会とする。

##### ②内容

本校がある飯南飯高地区や松阪市内で行われたイベントであるフェス木バル、棚田祭り、宮前フェスティバル、松阪もめんフェスティバル、飯南高校ハナノキコンサート、ふれあい祭り、ジョギング大会 in 茶倉に参加し、イベントのサポートや中高生の店「CHALLENGE & DREAM」を出店した。



##### ③検証（工夫した点・効果的だった点）

ア. 地域イベントに積極的に参加し、多くの大人との繋がりを形成

- a. 生徒の名刺を作成した
- b. イベントごとに参加依頼を受け入れるようにした
- c. 学校外の人にも声をかけてもらうようにした
- d. お客様への対応で言葉遣いが丁寧になり、人との接し方が上手くなった

イ. 中高生の連携力向上

- a. 中高生で縦割りの班を作り活動した
- b. それぞれの学校で自分たちの特色を意識した活動をする意識を持たせた

ウ. 「自分たちができること」を考える機会の増加

- a. 高校生自らイベントに参加できないかと交渉した
- b. 自分たちに足りていないものは何かと捉えることができた

#### ④検証（課題点）

中高生で活動する中で、中高生ともに成長する機会となったが、時間をかけた打ち合わせができず、縦割りの班が機能していなかった。当日に役割分担をするのではなく、準備段階からともに活動し、責任感をもった行動ができるようにすることが必要である。また目標設定が甘く、イベント当日に何をしたいのかわからず、時間を持て余す生徒がいた。

また、これまで商品に地域名が入ったTシャツやタオルを販売していたが、地域の資源を使用したものではなかった。これにより、地域の魅力を含んだ商品がないという課題を見つける機会となった。

### （3）地元の素材を利用した商品開発

#### ①目的

地域の良さを見つけ郷土愛を育むことや、地域企業と共同し地元の素材を利用した商品開発を行うことで、対話力や創造力を身に付ける。また、地域の本気の大人と関わる中で、そこから見える地域課題に対して当事者意識を持ち、自分ごとと捉えながら解決していく姿勢や、どのような商品を作れば地域への潤いを還元できるのかを考える機会とする。

#### ②内容

まず、自分たちの高校の周りにはどのようなもの・仕事があるのかを調べた。自然が豊かであり、木に囲まれた地域ということから製材加工会社「もくいち／マルゴ株式会社」を訪ねた。その中で、この地域が木とともに発展してきたことや、木を管理することで山や川、海を守っていることを学習した。その後、「沖中造林株式会社」が管理する山に入れていただき、木の大きさを肌で触れた。

地域の木を利用し、地域を知ってもらうため、さらには地域にお金を生み出すことを目標に商品開発が始まった。端材を利用して何かを作成したいという話し合いの中で、高校生ならではの【交換日記】から「木の手帳」というアイデアが生まれた。また、デザインはプロの知識と意見が必要であるため、飯高飯南地域にゆかりのある「浜佐建設デザイン」のデザイナーの方にも話し合いに加わっていただいた。約1年をかけて月2回程度の会議を開き、アイデアを商品という形あるものにしていった。ロゴ制作や値段設定においても、高校生の意見と企業側の意見を交わしながら決めていった。販売日は、松阪市内で10月に行われるフェス木バルに設定し、商品の開発からデザイン、値段設定を行うまでを生徒が企業とともに計画的に進めた。





### ③検証（工夫した点・効果的だった点）

ア. 地域を知るため直接企業へ訪問

- a. 企業側の地域課題を聞き、それを踏まえ地域の歴史を学習した
- b. 木についての体験学習を行った

イ. 道の駅コラボプロジェクトで扱うための地域の特性を持った商品開発

- a. 企業のサポートを得ながら、商品が完成するまでの過程を最初から最後まで行った
- b. デザインに関して、校内アンケートを行なった
- c. 値段に関して、製造にかかる費用や売価を計算して赤字にならないよう企業側の意見を踏まえ決定した
- d. ロゴに関して、飯南高校を意識したデザインになるよう試行錯誤し、プロの意見を交えながら作成した

ウ. 出来上がった商品を効果的に販売するための工夫

- a. 商品開発時から販売日を決め、計画的に進めた
- b. 企業や地域にお金を生み出すこと意識し、販売後の仕組みを作成した
- c. 商品を紹介するためのフライヤーについて、デザイナーの意見を聞きながら制作した

### ④検証（課題点）

商品開発をしていく過程で、応援団サークルの考えをもとに校内アンケートをとり、企業側の意見を踏まえ決めていったが、例えば授業でマーケティングを学習している生徒を加えて行うなど、学校の授業を意識した取組ができればより一層社会との繋がりが深い学びに繋がっていくだろう。

そして、商品開発から販売までを行えたが、購入していただいた方の実際に使った後の意見・感想が聞けていない。このことから、販売後に使い心地のアンケートをとるなど商品改良を意識した取組をすることや、消費者意識を持った活動を行うことも必要である。

## （４）【VICS】× 道の駅コラボプロジェクト

### ①目的

道の駅茶倉駅で中高生の店を出店し、訪れた方に飯南飯高地域の良さを知ってもらおう。中高生がともに活動することで育まれる対話力や追究力の育成を目的とし、また鈴鹿大学発のベンチャー企業である株式会社鈴りん探偵舎に協力していただいて大学生からのサポートを得ることで、自分たちだけで考える以上の創造力を生み出す。

### ②内容

「道の駅コラボプロジェクト」とは、本校の近隣にある２つの道の駅（茶倉駅・飯高駅）で、連携中である飯南中学校・飯高中学校とともに中高生の店「CHALLENGE & DREAM」を出店するというものである。飯南飯高の文字が入ったタオルやＴシャツ、地域の特産品である木を使った商品「木の手帳」などを販売している。

今回のイベントは商品を販売するだけでなく、生徒自らが「自分たちで地域を盛り上げるイベントを企画したい」という声を上げたことで行われた。「VICS」とは、バレンタイン(V)、飯南飯高(I)、茶倉駅(C)、鈴りん探偵舎(S)の頭文字をとったものである。大学生や高校生、中学生でグループを作り、高校生を各グループリーダーとして、イベントを円滑に進めるよう目標設定を行って活動した。イベントを楽しめるものにするため、物品販売や食品販売、体験型イベントを企画した。



### ③検証（工夫した点・効果的だった点）

- ア. 高校生が主体となりイベントを実施
  - a. 高校生が各班のリーダーを務める
- イ. 連携中学校と時間をかけた準備
- ウ. イベントを開催するにあたり大学生のサポートを中心に創意工夫
  - a. 中高大でのネット会議（zoomを利用）
  - b. 広報の工夫（地域回覧板利用、ラジオ出演、SNS広報、プレリリース）
  - c. 決起集会（日本経済大学高見啓一准教授からの助言）
  - d. 目標設定（来客目標111人、各グループでも設定）
- エ. 中高大でグループを作り、当日の運営を実施

### ④検証（課題点）

大学生のサポートもあり、中高大で連携がとれた準備・運営を行うことができた。しかし、来客目標111人には遠く及ばず、イベントの2月16日当日は降雨による天候不良もあってか結果として38人の来場だった。県内全域にも影響のあるラジオ出演をするなど広報を工夫して取り組んできたが、告知のタイミングが遅かったことやイベントをするにあたってターゲットングが甘かったこと、来客者の誘導が足りていなかったことなど、実際にイベントを企画し行動してみて気づく課題が多かった。

今回は、高校生の「きてもらおう方や自分たちも楽しめる企画をしたい」という自発的な活動が具現化でき、これまでともに活動してきた中学生との輪に大学生がさらに加わることで、準備段階から様々な工夫を行うことはできた。しかし、中高大各校の役割分担をはっきりさせることができず、効率的な準備ができなかったことは課題として残った。